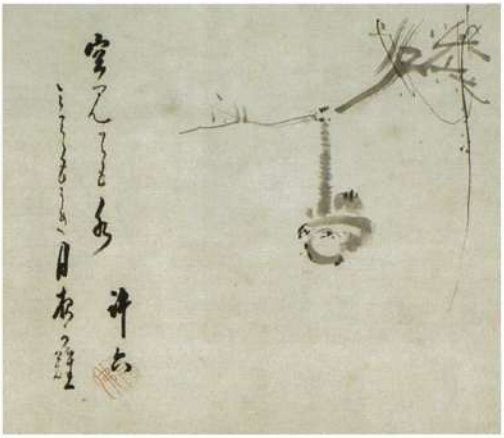
顕彰芭蕉翁

第97号　令和6年8月

初秋や
畳ながらの
蚊屋の夜着
芭蕉

名品解説　許六筆「空見ても」発句自画讃



許六筆「空見ても」発句自画讃

空見ても水
みてもうき月夜かな

許六

彦根の門人 許六（きょりく）による画讃で、絵・発句ともに許六の筆になります。枝からぶらさがる猿の絵に、手が届かない月への嘆きを詠んだ発句が讃として添えられています。伝統的な画題のひとつに「猿猴捉月図（えんこうそくげつ）」があります。猿が水に映った月を取ろうとしておぼれ死んだことから、身の程知らずの望みを持つとかえって失敗するという教えを伝える故事「猿猴捉月」を描いたものです。枝にぶらさがった猿が下方に手を伸ばし、水面に映る月を捉えようとする場面を描くことが一般的ですが、本作は、画面上には月がなく、猿も水面に手を伸ばしてはいませんが、月を渇望する発句が組み合わせられることで「猿猴捉月図」として鑑賞できる趣向となっています。

許六は、明暦二年（一六五六）生まれ。彦根藩士の家に生まれ、元禄二年（一六八九）に家督を継ぎました。公務でたびたび江戸に下向しており、芭蕉に入門したのも公務で江戸に滞在していた元禄五年（一六九二）でした。許六は、俳諧以外にも剣術・馬術・書道・絵画など諸芸に通じたと言われています。とりわけ絵画は、狩野派に学んでおり、芭蕉も「画はとつて予が師とし」（許六離別詞）と、教えを乞うています。

本作は、俳画らしい軽い筆致で描かれていますが、それでも線の強弱や木の枝と猿のバランスなどに、本格的に絵を学んだ人ならではの技量がうかがえます。「空」と「水」を対比させるような発句の筆跡も美しい画讃です。

（伊賀市文化振興課学芸員　服部温子）

巻頭句解説

元禄４年（1691）に詠まれました。初秋を迎え、昼間はまだ暑さが残るものの、夜になってさすがに冷えてきたので、畳んで置いてあった蚊屋をそのまま夜着として掛けて寝たという句です。夏から秋への推移が巧みに表現されていると同時に、蚊屋を夜着にするというところにユーモアが感じられます。

顕彰芭蕉翁　第97号
編集・発行／公益財団法人　芭蕉翁顕彰会／〒518-0873　三重県伊賀市上野丸之内117の13／電話0595・21・4081